イギリス英語方言概観

武本昌三

はじめに

アメリカ英語の方言の研究者が持ち続けてきた大きな関心事の一つは，アメリカ英語の方言が，その母胎であるイギリス英語の方言と，どのように関連しているかを，言語地図等によって明らかにしていくことであった。しかし，長年にわたってこれを阻んできたのは，Atwood も言っているように，[(1)] イギリス英語の方言の分布状況に関する客観的データの不足と，アメリカ英語の方言成立に特に関係の深い，イギリスにおける初期近代英語の方言についての知識の制約である。現在に至ってもなお，英米の研究者達の間でさえ，この分野の研究成果は極めて乏しく，殆んど未開拓のままで残されているのが実情である。時折，部分的な地域に限っての比較研究の結果などが発表されてきたが，英米方言の関連性についての overall な研究は，まだこれからの課題であるといってよい。

このような状況の中で，近年，Orton と Dieth の Linguistic Atlas of England のための調査資料が利用され得るようになってきたのは，大きな光明であり刺激である。ごく一部のアメリカの研究者は，すでにこの資料を

(1) "Our knowledge of the present-day distribution of dialect features in England is far from complete, and our knowledge of Early Modern English dialects is extremely limited. To argue from present-day distribution that a certain form must have been brought to an American colony from a certain area of England is risky and neglects the possibility that many forms may have become obsolete in certain areas in the course of two or three hundred years. Such a study should be undertaken only after many cautions and much historical research, and preferably only after a complete survey of England on Linguistic Atlas lines." E. Bagby Atwood, *A Survey of Verb Forms in the Eastern United States* (University of Michigan Press, 1953), p. 42, n. 18.

もとにして，英米方言の比較研究を試みているが，[2] 資料の公刊が進むにつれて，[3] 両方言相互の関連性を解明しようとする気運は益々盛上っていくに違いない。そのような展望の下に，この際，資料が少ないためもあって，今まであまり関心を寄せられることがなかったイギリス英語の方言そのものの歴史的変遷にも，あらためて目を向けておくことは，あながち無意味ではないと思われる。このようなことから，英米方言比較研究のための一つの stepping stone として，先づイギリス英語の方言を古期英語時代にまでさかのぼって，その大略をまとめておきたいというのが本稿の趣旨である。以下，叙述は次の順序にしたがう。

I. 古期英語の方言
II. 中期英語の方言
III. 近代英語の方言
IV. 現代英語方言の調査
むすび

I. 古期英語の方言

a. 方言の成立

英語は，言うまでもなく，5世紀中頃以来，Jutland 半島の南端よりドイツのライン川の河口に至る地域一帯から Britain 島に侵攻してきた Angle 族，Saxon 族，Jute 族などによってもたらされた言語である。[4]

(2) 例えば，W. Nelson Francis, "Some Dialectal Verb Forms in England," *A Various Language* (Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1971), pp. 108–120. はその pioneer 的研究の一つである．

(3) Harold Orton & Nathalia Wright, *A Word Geography of England* (Seminar Press, 1974) は最近のもので，1950年から1961年までの調査資料に基づいている．

(4) これらの諸民族が侵攻してくる前の Britain 島には，長らくローマの支配下にあったケルト系のブリトン人 (Britons) がいた．彼等はブリトン語 (Brittonic) を話し，公用語としてはラテン語を用いていたが6世紀の終り頃までにこれら諸民族によって滅ぼされてしまった．そして9世紀までの間に作り上げられたのが Northumbria, Mercia, East Anglia, Kent, Essex, Sussex, Wessex の七王国である．9世紀には Wessex が全イギリスの支配勢力にのし上がり，Alfred 王の治下 (871–899) に Wessex の文化は大いに栄えた．English は，これら渡来ゲルマン人が自からの国語を Englisc [éŋgliʃ] と呼んだことに由来する．

これらの種族の中で，真先にやってきたのは Jute 族であった。彼等は，Jutland 半島から直接北海を渡ってきたのではなくて，ドイツ北西部に下降して住んでいた Jute 族の子孫であったといわれる。イギリスでは彼等は，主として現在の Kent 州に住みついたが，一部は更に西に向かって Wight 島やその対岸の Hampshire 海岸地帯にまでひろがっていった。Saxon 族は，もともと現在の西ドイツの Holstein 地方に住んでいたのであるが，イギリスでは，Essex, Sussex, Middlesex のほか，Thames 川の北部にも定着し，その中の一部は，South Warwickshire にまで達している。彼等はやがて，すでに Wight 島や Hampshire にまでひろがって定住していた Jute 族の勢力を凌ぐようになっていった。一方，Angle 族の方は，同じく西ドイツの Schleswig 北部地方から渡来したが，イギリスでは中部諸州を中心に，東部と北部にひろがり，その最北端は Lowland Scotland の The Firth of Forth にまで達した。[5] これらに先住民族の Celt 族の分布をも加えると，その頃のイギリスは，およそ図-1 のような分割状態であったと考えられる。[6]

これらの分割状態や出身地の相違が，当然イギリスにおける方言成立の原因となり，且つ方言発達の温床となり得たであろうことは想像に難くない。

---

(5) これらの部族の大陸における居住地については異説もあってつまびらかではない．例えば Baugh は Jute 族が半島の北半分に，そして Angle 族は南半分とその底部に居住していた，と次のように述べている．"The traditional account of the Teutonic invasions goes back to Bede and the Anglo-Saxon Chronicle. Bede in his *Ecclesiastical History of the English People*, completed in 731, tells us that the Teutonic tribes which conquered England were the Jutes, Saxons, and Angles. From what he says and from other indications it seems altogether most likely that the Jutes and the Angles had their home in the Danish peninsula, the Jutes in the northern half (hence the name Jutland) and the Angles in the south, in Schleswig-Holstein, and perhaps a small area at the base." Albert C. Baugh, *A History of the English Language* (Routledge & Kegan Paul Ltd., 1963), pp. 53–54. 同書の The Home of the English の図はこの Bede に基づいて作られているが，別の見方もあることを，次のようにつけ加えた．"An alternative opinion places the Angles on the middle Elbe and the Jutes near the Frisians." この問題に関する文献については，Otto Jespersen, *Growth and Structure of the English Language* (Doubleday & Co., 1956), pp. 35–36 参照．

(6) H. Alexander, *The Story of Our Language*, p. 36 から H. Orton & N. Wright, *ibid.* p. 10 へ転載されたものを修正．

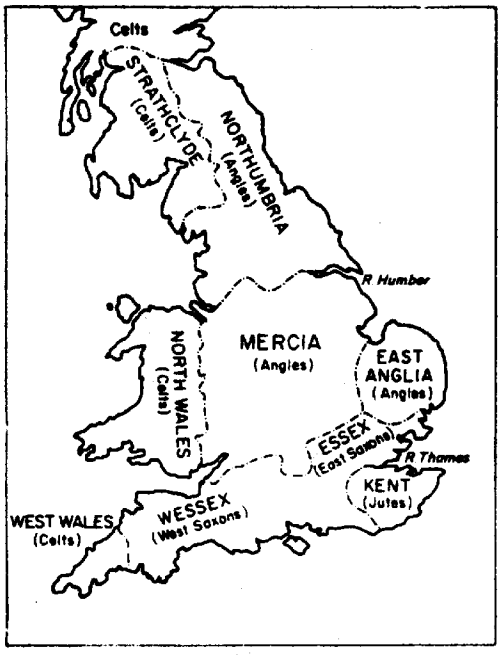

図-1

方言は事実存在し，そして発達していった。しかしその実態がどのようなものであったかを明確に知ることは，今日なお，文献資料の不足のために困難が多い。(7) 乏しい文献から確認されていることは，ただ，古期英語の方言は地理的に四つに分類出来るというようなこととそれぞれの方言の若干の特徴だけであるに過ぎない。(8)

b. 方言の地域的分類

古期英語の方言は地理的に区分し

(7) OE の資料の中，文学的・民族学的価値の最も大きなのは叙事詩 *Beowulf* であるが，今日伝わっている唯一の写本は Late West Saxon で記され，他の方言，特に Anglian の痕跡を留めている．又3種の写本集に収められているキリスト教の影響を受けた古代英詩10数篇も，同じく言語的に純粋ではない．従ってこれらは OE の資料としては比較的価値が乏しい．各方言を知る確実な資料の中主なものを石橋幸太郎編「英語学辞典」成美堂，から拾うと次の通りである．(a) Northumbria 方言．787年に始まる DANISH INVASIONS で焼失したものが多く，断片的なものやラテン語の行間の逐語訳をした Gloss がある．その他，*Cædmon's Hymn* (9行，737年ごろ)，*Bede's Death-Song* (5行，9世紀ごろ，St. Gall Library 所蔵)，*Ruthwell Cross Inscription* (16行，Runic で石碑に刻まれている．680年ごろのもの．Ruthwell [ríðəl] はスコットランドの Dumfriesshire にある地名)，*Frank's Casket* (小箱に50のルーン文字で刻まれている．700年ごろのもの．British Museum 所蔵，Frank は前所有者の名)，*Lindisfarne Gospels* の Glosses (700年ごろ，Durham で書かれているので Durham Book ともいう，British Museum 所蔵)，*Rushworth Gospels* の Glosses (8世紀ごろ，Bodleian Library 所蔵，Rushworth は寄贈者)，*The Durham Ritual* の Glosses (10世紀ごろ，Durham の Cathedral Library 所蔵)，*The Leiden Riddle* (14行，オランダの Leiden 所在)．(b) Mercia 方言．*Epinal Clossary* (700年ごろ，単語集，フランスの Epinal 所在)，*Erfurt Glossary* (9世紀ごろ，ドイツの Erfurt 所在)，*Corpus Christi Glossary* (8世紀ごろ，Cambridge の C.C. College 所蔵)，*The Leyden Glossary*, *Vespasian Psalter* (9世紀ごろ，聖歌集，British Museum 所蔵，Vespasian は図書記号)，*Lorica Prayer* (ラテン語の呪文 (じゅもん) の注解 (Gloss)，Cambridge 大学図書館所蔵)，*Rushworth Gospels* のうち *Matthew* と *Mark* の部分の注解．(c) Kent 方言．資料が乏しく，7，8世紀のラテン語の勅許状 (Charter) に人名や地名が英語で表わされている程度である．9世紀以後には，英語で書かれた勅許状がある．(d) West Saxon 方言．King Alfred (在位871–899) の翻訳による Gregory の *Cura Pastoralis*, Orosius の世界史 *Historia adversus Paganos*, Bede の *Historia* など．*Anglo-Saxon Chronicle*, *Ælfric's Grammar and Glossary*, *

て，Northumbrian, Mercian, West Saxon, Kentish に分けられる。これらの方言を区分するおのおのの境界線も明確ではないが，一般的には次の図のように[9]，Northumbrian は Humber 川の北部地域，Mercian は Humber 川と Thames 川にはさまれた中部地域，West Saxon は Thames 川南部で古代の Wessex 王国にほぼ匹敵する地域，それに Kentish は Thames 川に接して南東に位置する現在の Kent 州よりやや広めの地域というように分けられているのが普通である。

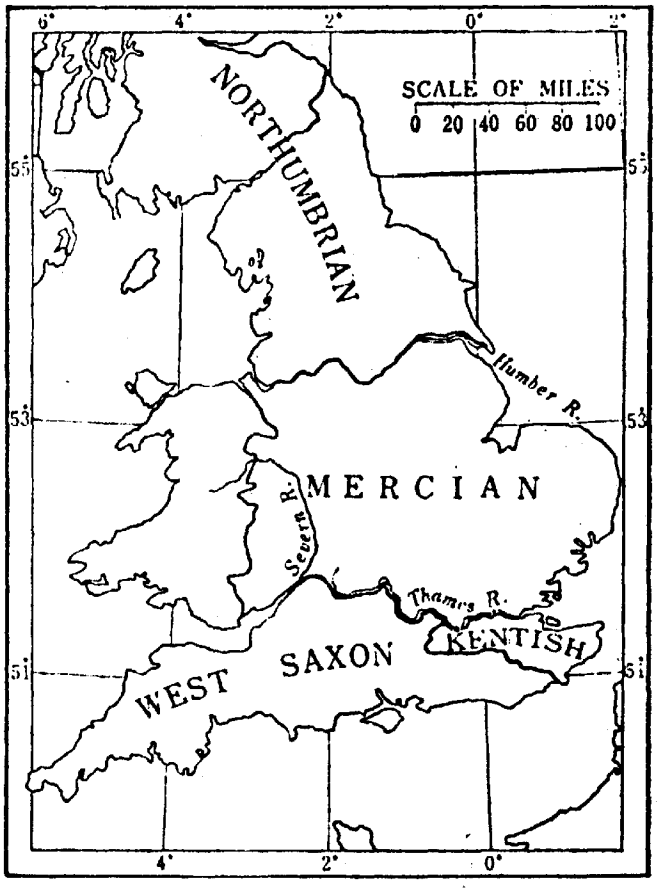

図-2

この中，Northumbrian と Mercian は，図-1 にも示されているように，両方とも Angle 族が定着した地方で，従って，方言そのものも互い

* *Ælfric's Homilies, West-Saxon Gospels.* また Anglian の要素が混入しているが，Late West Saxon で書かれた *Beowulf* などがある．

(8) "As the Teutonic settlers in Britain represented different tribes, their language represented dialects more or less diverse. While the different tribes could no doubt understand each other, there was no common tongue, and no common written language. When these tribes became established in Britain, and through Old English times, there were four distinct speech divisions." Oliver F. Emerson, *The History of the English Language* (Macmillan Company, 1930), pp. 44–45. もっとも，Pyles は OE 方言間の差異はむしろ少なかったことを強調して次のように述べている．"It should be stressed that Old English Dialectal differences were slight as compared with those which were later to develop and nowadays sharply differenciate the speech of the lowland Scottish shephead from that of his South-of-England countespait." Thomas Pyles, *The Growth and Development of the English Language* (Random House, Inc, 1952) p. 106.

(9) Albert C. Baugh, *A History of the English Language* (Routledge & Kegan Paul Ltd., 1963), p. 61 の図を修正．

に共通しているものが少なくはない。このことから，これら両者を合わせて Anglian という名で呼び，Northumbrian と Mercian はその subdivision であると考えることも出来る。いづれにせよ，OE 方言の地域的分布においては，Angle 族の Anglian が最大であった。しかし，政治的には Wessex が優位に立っていたことを反映して，West Saxon が方言として最も prestige を持っていたと思われる。現存する OE の文献も，殆んど West Saxon で書かれたものであって，それ以外のものは極めて少ないことも，これを裏づけていると言えるであろう。

それでは，これらの方言はそれぞれどのような特徴を持っていたのであろうか。文献資料が少ないだけにこれを詳細に検討していくことは困難であるが，今日までに明らかにされてきた若干の特徴を以下，Brook の記述を基にして[(10)]，まとめていくことにしたい。

c. 方言の特徴

Anglian (Northumbrian と Mercian を含む)

1. *l*+子音の前に *a* を用いるが，これは西部ゲルマン語の *a* が残された形である。'all' を *all*, 'to hold' を *haldan* と Anglian でいうが，West Saxon や Kentish ではこの *a* は *ea* となり，したがって上例はそれぞれ，*eall, healdan* となる。この Anglian の *a* は，そのままの形で West Saxon や Kentish にも見られることがあるが，逆に，ea- 形が Anglian に用いられることは少ない。

2. 語頭あるいは流音の *l* か *r* のあとにあって，*c, g* または *h* の前にくる場合，二重母音 ĕa, ĕo, ĭo はそれぞれ ĕæ (後にはしばしば ĕ), ĕ, ĭ と単母音化する。例えば West Saxon では 'eye' は *ēage* であるが，Anglian では æge, ēge となり，'work' は West Saxon の *weorc* に対して Anglian は *werc* である。

---

(10) G. L. Brook, *English Dialects* (Andre Deutsch Ltd., 1965), pp. 40–54 参照.

3．West Saxon が非円唇母音の ĕ となる場合も，Anglian では前舌円唇母音 œ̆ になる傾向がある。二重字 œ は通常 West Saxon の文書には見られないが，Anglian では œ̆ も ĕ も用いられている。例えば，'oil' 'home' を West Saxon では *ele, ēpel* というが，Anglian では *œle, œ̄pel* となる。

4．動詞の一人称単数現在の語尾が -u 形（又は -o 形）をとる。West Saxon や Kentish の場合は，この動詞語尾は願望法の -e にとって代られている。'I bind,' 'I judge' はしたがって，Anglian では *bindu, dœ̄mu* となり，West Saxon では *binde, dēme* となる。

Northumbrian

1．r＋子音の前に西部ゲルマン語の名残りの *a* をおく。唇音 *p, b, f, m* 又は *w* が母音の前にある時，あるいは *r* のあとにくる時，特にこの傾向は強い。この特徴は Mercian にも若干見られるが，Northumbrian 以外では通常 *ea* が r＋子音の前にくる。例えば Northumbrian で 'child' 'protector' がそれぞれ *barn, ward* であるのに対し，他の方言では *bearn, weard* である。

2．語頭の *w* が次にくる母音又は二重母音を円唇母音化する傾向がある。Northumbrian では *w* のあとにしばしば *o* がくるが，他の方言では単母音の二重母音化や逆成によって *eo* となる。例えば Northumbrian では 'to become' が *worða* に，'to say' が *cuoða* となるが，West Saxon では *weorðan, cweðan* である。

3．語尾の -n が脱落する。強変化動詞の過去分詞は普通そうではないが，この脱落は，後期の Northumbrian において特に著しい。'beyond' 'to be' は West Saxon ではそれぞれ *bigeondan, wesan* であるが，

Northumbrian では *-n* が落ちて，*bigeonda*, *wosa* である。

Mercian

1．æ が口蓋化して *e* と *a* になる。例えば，'day' 'father' は他の方言では *dæg* (pl. *dagas*), *fæder* であるが，Mercian では *deg* (pl. dægas), *feder* となる。

2．後舌母音が次の音節の中にある時，その影響で æ が逆母音変異により *ea* に変る。ただしこの変化は，次に続く子音が *c* か *g* の場合には起らない。他の方言では，例えば，'vessels' を *fatu* というのに対して，Mercian では *featu* に変る。

Kentish

1．ȳ の調音では舌の位置が低くなり非円唇母音の ē となる。例えば他の方言では 'sin' が *synn* であるのに対し，Kentish では *senn* となる。

2．母音変異によって ǣ 音が ē 音へ変化する。例えば他の方言では 'any' 'most' を *ǣnig*, *mǣst* というが，これらは Kentish では *ēnig*, *mēst* になる。

West Saxon

1．西ゲルマン語の *ā* は，ゲルマン語の ǣ からきているが，この ǣ が West Saxon に復活している。他の方言ではこの ǣ は高められて ē となり，例えば，'deed' 'hair' は dēd, hēr となった。West Saxon ではこれらはそれぞれ dǣd, hǣr である。(11)

(11) "This dialectal feature may date back to a time before the Germanic invasion of Britain, since the raising to *ē* is found also in Old Frisian." Brook, *ibid.*, p. 49.

2．前に口蓋子音がある場合，その影響を受けて母音が二重母音化する。（この特徴は，地理的に離れているにもかかわらず，後期の Northumbrian にも或程度見られる。ただし，二重母音化にはこまかい差異があって，全く同じであるというわけではない。）例えば，'boast' は *gielp* となり，'to pay' は *forgieldan* となる。他の方言では，それぞれ，*gelp*, *forgeldan* である。これらの語を発音する場合，*g* 音は 'young' の *y* のように [j] と口蓋化される。

3．母音変異によって ĕa と ĭo が ĭe に変る。他の方言では *ĕa* は *ē* となり *ĭo* はそのままで変化しない。したがって，'to hear' 'darkness' 'to laugh' は，それぞれ，*hēran*, *pīostru*, *hlehhan* となるが，West Saxon では，*hīeran*, *pīestrn*, *hliehhan* である。(12)

4．他の方言では多くの語で逆母音変異が見られるが，West Saxon にはそれがない。例外的に逆母音変異が起るのは，語幹母音と変異を作り出す語尾母音との間の子音が流音であるか，又は唇音である場合だけに限られる。したがって，West Saxon では，'prayers' が *gebedu*, 'scholar' が *wita* であるのに対し，他の諸方言では，*gebeodu*, *wiota* に変る。

5．動詞の三人称単数直説法現在形に音節省略形を用いる。他の方言では通常 *-eð* の形をとり，例えば，'chooses' 'holds' は *cēoseð*, *haldeð* となる。しかし West Saxon ではこれらは，*cīest*, *hielt* である。

---

(12) このような語いのいくつかの例を，West Saxon—Anglian—Modern English の順に並べてみると次のような対応が見られ，現在の標準英語は Anglian，特に Mercian に近いことがわかる．現在の標準英語が，当時方言として最もひろく用いられ隆盛をきわめていた West Saxon から発達してきたものではなくて，Mercian の流れを汲むものであることは興味深い事実である．Eall—all—all；ceald—cald—cold；dǣd—dēd—deed；ēage—ēge—eye；eald—ald—old；hīeran, hȳran—hēran—hear；leoht—liht—light．これによると，WS ea—Angl. a；WS ǣ—Angl. ē；WS īe, ȳ—Angl. ē；WS eo—Angl. i の対応が見出される．また，ic—ih—I；hine—him—him；hie—hea—her；eom—am—am；eart—art—art；bryd—bird—bird というような対応も見られる．

II. 中期英語の方言

a. 方言の区画

中期英語（1150–1500）の時代は，英語が言語として最も大きな変化をとげた時代であった。OE 時代の末期に始まった音声上及び文法上の変化は，1066年の Norman Conquest によって急速に促進され，いわゆる語尾屈折の水準化現象が起った。それと同時に，これを補う分析的手段が発達し，OE 時代の綜合的特質は殆んど失なわれてしまったといえる。一方，語いの点では，OE 固有の語が大いに減じて，その代りにおびただしい数のフランス語とラテン語の語いが流れ込んできた。OE 時代のはじめには「外国語」のようであった英語はこのようにして，時代の終り頃にはもう殆んど近代英語に変容していたのである。(13)

このような変容は，とりもなおさず，種々の方言自体の変容でもあるわけであるが，ME 時代でもう一つ重要なことは，この Norman Conquest と同時に，West Saxon がそれまで持ち続けてきた方言としての優位性を失ってしまったたことである。方言間の優劣が無くなり，人々はそれぞれ，自分達自身の方言でものを書きはじめた。(14) このようなことから，この時代の各種

(13) Baugh, *ibid.*, p. 189.

(14) したがって，地方毎に数多くの方言的相違があらわれるのが ME 時代の特徴である．"One of the striking characteristics of Middle English is its great variety in the different parts of England. This variety was not confined, as it is to a great extent today, to the forms of the spoken language, but appears equally in the written literature. In the absence of any recognized literary standard before the close of the period writers naturally wrote in the dialect of that part of the country to which they belonged. And they did so not through any lack of awareness of the diversity that existed. Giraldus Cambrensis in the twelfth century remarked that the language of the southern parts of England, and particularly of Devonshire, was more archaic and seemed less agreeable than that of other parts with which he was familiar; and at a slightly earlier date (c. 1125) William of Malmesbury had complained of the harshness of the speech of Yorkshire, saying that southerners could not understand it. Such observations continue in subsequent centuries." Baugh, *ibid.*, pp. 227–228.

方言の研究資料は，OE 時代に比べるとはるかに豊富である。[15]

しかし，文献資料が豊富であっても方言区画を明確に決定することはやはり困難であることには変りはない。方言の区画決定のためには，さまざまな方言のテキストを十分に研究する必要があるが，研究が進めば進む程，諸種の方言の特徴が互いに入りくみ混在して，境界区域は複雑に錯綜する。したがって ME 方言の区画も，種々の方言的特徴から割り出した最大公約数的な想定線であることをまぬがれない。一般的には，OE の

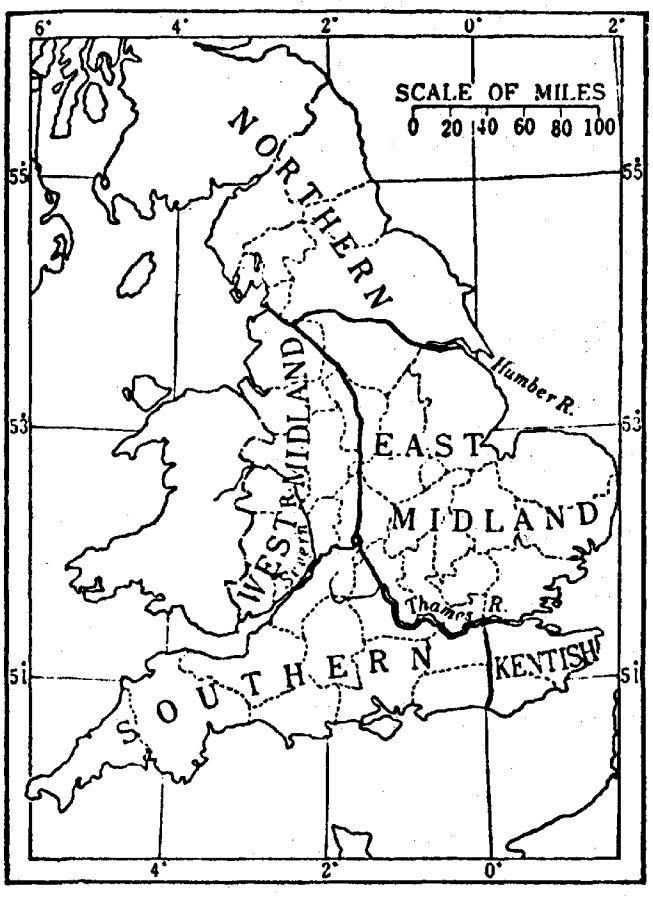

図-3

(15) 所属地方と年代が判明していて語史的研究の確実な資料となるものは次の通りである．(1) Northern. *Metrical Psalter* (1300年以前), *Cursor Mundi* (1300年以前), Pricke of Conscience (1349年以前). (2) Midland. *The Peterborough Chronicle* (1154年頃), *Ormulum* (1200年), alliterative poems (1360年頃). (3) Kentish. 諸種の sermons と homilies (1200–50年), *Ayenbite of Inwit* (1340年). (4) Southern. *History of the Holy Rood Tree* (1170年頃), *Ancren Riwle* (1225年頃). 市河三喜編「英語学辞典」研究社. Emerson もこの資料に言及して，次のようなものが "typical examples" であると述べている. "For the Southern dialect there are the *Lives of St. Katherine* and *St. Juliana*, the *Ancren Riwle* or *Rule of Nuns*, and Robert of Gloucester's *Chronicle*. Kentish is represented by the *Kentish Sermons* and the *Ayenbite of Inwit* or 'Prick of Conscience.' Some representative texts of the Midland dialect, which is especially important to the student of modern English, are the *Ormulum*, or book of Orm, a particularly important text for Middle English; the *Bestiary*, *Genesis and Exodus*, Layamon's *Brut* (the later text), *Piers Plowman*, the *Alliterative Poems* of an unknown poet, and Robert of Brunne's *Chronicle*. The Northern dialect is represented by a *Metrical Psalter*, the *Cursor Mundi*, a verse history of the world, the *Metrical Homilies*, the *Prick of Conscience*, and the *Towneley Mysteries*." Emerson, *ibid.*, pp. 52–53.

方言区画をほぼそのままに受けつぎ，図-3[16]に示すように，Northern, East Midland, West Midland, Southern, Kentish の五つに区分するのが普通である。この区分により，次に OE 方言と同様，各地方毎の方言的特徴を見ていくことにしたい。

b. 方言の特徴

Northern

1. OE の *ā* は，他の方言の場合のように円唇音とはならず，15 世紀になってから口蓋化され，やや高の［ɛ:］と発音されるようになった。もっとも，一般には *a* は綴字の中には残されている。例えば‘stone’(OE *stān*) は，Southern や Midland で *stone* となったのに対し，Northern では *stane* であった。[17] 同様に，‘whole’(OE *hāl*) は，Southern や Midland の *hool* に対し，*hale* のままである。

2. 14 世紀後半に，*ai, ei, oi, ui* の二重母音は，末尾が脱落して，*ā, ē, ō, ū* となった。

3. OE の *y̆* は非円唇音の *ĭ* に変った。ただしこれは，East Midland にもあてはまる。

4. 2 音節語でしかも開音節の場合には，ME の *a, e, o* はすべての方言で長母音となったが，特に Northern では，*i, u* においても長母音化し，それぞれ閉母音，ē, ō のように発音された。

---

(16) Baugh, *ibid.*, p. 230 の図を修正.

(17) 各方言の母音を OE の母音と対比すると次のようになる.

OE	North	E. Mid	W. Mid	South	Kent
stān	stān	stōn	stōn	stōn	stōn
heorte	herte	herte	[hørtə]	[hørtə]	herte

5. 鼻子音の前では，OE 初期の *a* は，*a* と *o* の中間音であった。そのために綴りでは *a* となったり *o* となったりした。Northern ではこれがすべて *a* となる。*Auld lang syne* の *lang* はその一例である。

6. 14 世紀初期には，OE と古代ノルウエー語の *ō* が［y:］と発音された。例えば‘immediately’(OE *sōna*) は *sune* となり，‘book’(OE *bōc*) は *buik* となった。

7. *gh* 又は *ch* と綴られていた無声摩擦音の前では，ほとんどの ME 方言において，母音 *a*, *e*, *o* が二重母音化していたが，Northern の場合，*e*, *o* は変化せず，二重母音化したのは *a* だけであった。例えば，‘taught’ ‘eight’ は *taught*, *aught* となったが，‘sought’ は *soght* 又は *socht* のままである。

8. 一般に -e 語尾は綴字の上では残されても，発音の際にはそれまであった弱強勢が 15 世紀頃までに消えてしまっていた。Northern の場合は，特にこの -e 語尾の消失が早く，13 世紀頃のことと思われる。しかも綴字の上でもこの影響はあらわれ，14 世紀の文献には -e 語尾は無いのが普通である。例えば，‘to love’(OE *lufian*) は *luf* となって，Midland の *love*(*n*) のように -e 語尾はつかない。

9. 13 世紀頃，2 音節語のうち弱強勢のおかれた語尾の子音の前では，*e* は *i* に変った。例えば‘walls’は *wallis* であり，‘wonder’は *wondir* であった。

10. Northern では多くの語の中に破裂音 *g*, *gg*, *k* があったが，それらは Midland や Southern では，それぞれ，［j］(綴字 y 又は ȝ)，［dʒ］(綴字 dg)，［tʃ］(綴字 ch) と発音されていた。

11. OE 時代の名残りとして語頭の hw- は Northern では特に強く発音され，綴字の上でも，*qu(h)*, *qw(h)* となった。[18] 例えば 'what' の OE *hwæt* が *quat* 又は quhat となり，Midland, Southern では *what* 又は *wat* となって対照的な相違を見せている。

12. 語尾にある場合又は弱強勢の語の中で，OE *sc* からきた ME *sh* は，Northern では *s* となった。したがって，'flesh' (OE *flǣsc*) は *fless* となり，'fish' (OE *fisc*) は *fiss* であった。'English' (OE *Englisc*) が Inglis, 'shall' (OE *sceal*) が *sal* となったのも同じ例である。

13. 動詞の語尾変化で，三人称単数直説法現在及び複数直説法現在が -(*e*)*s* となり，現在分詞は -and(e) であった。[19]

East Midland

1. 鼻子音の前におかれる OE *a* 又は *o* は，通常 West Midland では *o* であるが，East Midland では非円唇音の *a* となって *name* のように用いられる。ただし，*nd*, *ng*, 又は mb の前ではこの変化は起らず，長母音化して，*hond*, *lond* のようになる。

---

(18) Northern 以外の方言では OE の *hw-* は先づ無声化して *w* となり，後に有声音の *w* に変った．ただし綴字の上では *wh-* となり，それが Mod E に残されて今日に至っている．

(19) これらは ME 方言の中では，最も識別し易い特徴の一つである．
"The feature most easily recognized is the ending of the third pesson plural, present indicative, of verbs. In Old English this form always ended in *-th* with some variation of the preceding vowel. In Middle English this ending was preserved as *-eth* in the Southern dialect. In the Midland district, however, it was replaced by *-en*, probably taken over from the corresponding forms of the imperfect and the subjunctive or from preterite-present verbs and the verb *to be*, while in the north it was altered to *-es*, an ending that makes its appearance in Old English times. Thus we have *loves* in the north, *loven* in the Midlands, and loveth in the south. Another fairly distinctive form is the present participle before the spread of the ending *-ing*. In the north we have *lovande*, in the Midlands *lovende*, and in the south *lovinde*. In later Middle English the *-ing* appears in the Midlands and the south, thus obscuring the dialectal distinction." Baugh, *ibid.*, p. 229.

2. ME 初期には OE ĕo は一般に円唇前舌母音［ø］になっていたが East Midland では，これは 12 世紀に非円唇母音に変ってしまっている。例えば‘heart’(OE *heorte*) は，West Midland の *heorte* 又は *huerte* に対し，East Midland では *herte* であり，‘deep’(OE dēop) は，West Midland の *deop* に対して，*dep* である。

3. OE ȳ が非円唇化して ī になる。ただし，これは Northern にもあてはまる特徴である。

4. Southern や West Midland と違って，h（しばしば *gh* と綴られる）の前の *a* が *au* に，*o* が *ou* に二重母音化される傾向はあまり見られない。[20]

5. 動詞複数形の直説法現在は通常，語尾 *-e(n)* であった。これは West Midland も同様である。

West Midland

1. OE ȳ が円唇前舌閉母音として残され，通常 *u* と綴られる。これはフランス語の影響を受けた結果で，‘to hide’(OE *hȳdan*) は *hude* となり，‘to kiss’(OE *cyssan*) は *kusse* となった。ただし，South West にも同じ特徴がある。

2. 鼻子音の前では，開音節の中においてさえも，‘name’(OE *nama*) が *nome* になるように，*a* より *o* になる傾向が強い。[21] 例外的に *a* になる

(20) 例えば Chaucer (? 1340–1400) は当時のロンドン方言，すなわち後期 ME の South East Midland の方言で著作したが（ただし韻文には南部方言及び西南方言の要素が多い），‘brought’を *broght*, ‘wrought’を *wroght* と書いている．

(21) この，開音節の中が *o* であるかどうかが West Midland と South-Western を分ける一つのきめ手になっている．South-Western では普通，子音群の前におかれて母音が長母音になる場合のほかは，*o* は *a* となる．

のは，'one' の *man* や，接続詞 *and* のような弱強勢語の場合だけである。

3. West Midland の特に北部では，*ng* の前にくる *o* は *u* に高められて発音される。例えば，*long* (OE *lang*) は *tonge* と韻が合っている。[22]

4. OE *ĕo* が変化して West Midland で円唇前舌母音 [ø] と発音される傾向が 14 世紀に入ってからもしばらく続いた。綴字では *eo, oe, u, ue* となるが，この特徴は South-Western にもあてはまる。しかしこの [ø] は，West Midland では円唇閉母音 [y] として発音されるようになり，綴字では *u* となった。この傾向は特に *r* の前で起り易い。例えば，'man' (OE *beorn*) は *burn* となり，'people' (OE *lēod*) は *lude* 又は *leude* となった。

5. 流音又は鼻音に続く語尾の *b, d, g* はしばしば無声化して p, t, k になった。例えば 'young' (OE *iung*) は *ȝonke*, 'thing' (OE *ping*) は *pynke* となり，OE *and* は *ant* となった。さらに語尾の *d* は，しばしば 'beheaded' が *hadet* になるように，弱強勢の音節で無声化した。

Kentish (South-Eastern)

1. OE ȳ が Kentish では非円唇母音 ē となり，例えば，'to kiss' (OE *cyssan*) は *kesse* に，'hill' (OE *hyll*) は *helle* となった。この変化は OE 時代の Kentish にすでに見られた特徴であるが，ME 時代には分布範囲がより広く周辺にひろがっていたと考えられる。

2. Kentish で 9 世紀に OE æ が，'was' (OE *wæs*) が *wes* になったように，*e* に変り，この傾向はそのまま続いて，14 世紀の文献にも多く見

(22) これが標準英語の発音 among [əmʌŋ] の起原であるとされている.

られるようになった。

3. OE の二重母音発達の名残りが Kentish には特に強く見られる。OE *ĕa* は殆んどの ME 方言で［ɛ］又は［ɛ:］となったのに対し，Kentish では，OE *dēaf*（'deaf'）が *dyaf* となり OE *dēad*（'dead'）が *dyead* となったように，*ya* と *yea* の綴りが普通であった。さらに又，OE *heorte*（'heart'）が *hierte* に，OE pēod（'people'）が *piode* に，そして OE *pēof*（'thief'）が *pyef* になったように，OE ĕo はしばしば，*e* のほか，*ie, ye, io* と書き綴られた。

4. 語頭の無声摩擦子音はしばしば有声化され，OE *synn*（'sin'），OE *flǣsc*（'flesh'）はそれぞれ Kentish では，*zenne, vlesshe* となった。この特徴は Southern にもあてはまる。

5. 殆んどの ME 方言で *l* の前におかれた語頭の OE *h* は消滅していたが，OE *hlāford*（'lord'）が *lhord* となったように，Kentish では OE *hl-* の変形としての *lh-* がしばしば見られる。

6. Kentish の文献では，ō はしばしば *uo* と綴られている。

Southern

1. West Midland と同じく，OE ȳ は普通 *u* と綴られ，円唇前舌閉母音のままで変化しない。

2. OE 時代には二重母音 *ĭe* は West Saxon の特徴の一つであったが，これはその後単母音化して，ȳ あるいは時により ī となっていた。ME 時代になると，Kentish ではこの発音［y］そのものは変らずに残ったが，綴字はフランス語の影響で *u* となり，長母音の時には *ui* 又は *uy*

と綴られた。例えば OE の West Saxon *hierde*, Anglian *hiorde*, *heorde* ('shepherd') は *hurde* となり，West Saxon *hieran*, Anglian *hēran* ('to hear') の場合は *huiren* となった。ただし ME の後期に入ると，これらの *u*, *ui*, *uy* もだんだんと *e* にとって代られるようになる。[23]

3. Kentish と同様，OE æ は ME の初期の文献では *e* に変っている。

4. Kentish と同様，語頭の *f* と *s* はしばしば有声化して，*v* と *z* になった。[24]

5. 一般に，ME 方言の中では Southern が最も保守的であり，OE の接頭辞 *ge-* は *y-* の形で Midland などよりも長く残されていた。

6. West Midland 南部をも含めて Southern では，強変化動詞において，複数過去形又は過去分詞の母音が，類推によって単数過去形にまでひろがる傾向があった。例えば，OE *-gann* sg., *-gunnon* pl. ('began') が Southern では *gun* となり，OE *band* sg. *bundon* pl. ('bound') は *bounde* となっていた。

7. Kentish を含めて，三人称単数とすべての人称の複数直説法現在の動詞は *-eth* で終り，ME の初期には現在分詞の語尾は *-inde* となっていた。しかし時が経つにつれて，複数語尾の *-eth* は除々に Midland の語尾 *-e(n)* にとって代られ，分詞形の語尾 *-inde* は *-ing* に変っていった。[25]

---

(23) したがって一般的には，'to hear' は (Northern) *her(e)*, (Midlands) *here(n)*, (Southern) *here(n)* である.

(24) "In Southern Middle English we find *vor*, *vrom*, *vox*, *vorzope* instead of *for*, *from*, *fox*, *forsope* ('forsooth'). This dialectal difference is preserved in Modern English *fox* and *vixen*, where the former represents the Northern and Midland pronunciation and the latter the Southern." Baugh, *ibid.*, p. 231.

(25) 注(19)参照.

III. 近代英語の方言

a. 方言の区画

1500年頃以降，近代英語になってからの英語の全般的な著しい特徴の一つは，いわゆる無屈折時代に入ったことで，これは，屈折語尾の持つ意味上の限界が，思想の発達や文化の向上によって，除々に破られていった結果であるといえる。このような変化に附随して，固有の英語が大部分単音節語になり，また性を区別する名詞・代名詞の語尾が水準化したため，固有の文法的性が消滅し，これに代って心理的性があらわれた。16世紀には特に，品詞間の限界があいまいになり，名詞，形容詞，動詞などの間の転換が自由になったりもしている。

中期英語に比べて近代英語を区別するもう一つの大きな特徴は，ラテン語やフランス語の影響を強く受けて，英語が甚だしくロマンス語化したということである。一方，中期英語のロンドン方言は，近代英語になって次第に標準英語の地位を占めはじめ，印刷機の発明による文書の流布や教育の普及，交通通信の発達などに助けられて，イギリス全土にその prestige をひろめていった。[26] それまでは各地方毎の方言で書かれていた文学作品なども，殆んどロンドン英語で書かれるようになって，少くともそのような文筆の分野に限っては，方言の重要性も大いに減じてしまったと言えないこともない。

しかしこのことは勿論，一般民衆の中に融け込んでいる地方方言の衰退を意味するものではないし，諸方言間の相違が，時代とともに埋め合わされ

(26) "With the introduction of printing in 1476 a new influence of great importance in the dissemination of London English came into play. From the beginning London has been the center of book publishing in England. Caxton, the first English printer, in his numerous translations used the current speech of London, and the books that issued from his press and from the presses of his successors gave a currency to London English that assured more than anything else its rapid adoption. In the sixteenth century the use of London English had become a matter of precept as well as practice." Baugh, *ibid.*, p. 235.

て，除々に平均化していったわけでも必らずしもないであろう。[27] あくまでも方言は健在であり，一般的には方言区画も次の図-4のように分けられて，内容的にはむしろ，より複雑多彩な全貌をあらわにしてきたとさえ言えるのである。[28] これらの五つの方言は，それぞれ次のような地方を含んでいる。[29]

(Northern) Northumberland, North Durham, South Durham, Cumberland の大部分，Westmoreland, North Lancashire, West Riding of Yorkshire の丘陵地方，North and East Ridings of Yorkshire.[30]

---

(27) Emerson はむしろ方言間の相違を強調して次のように述べている．
"England has now no less than six distinct dialect divisions with numerous subdivisions. The main divisions are the Lowland of Scotland, the Northern, Midland, Western, Eastern, and Southern, each with marked peculiarities. These differ so greatly, as spoken by the common people, that a yeoman of one district might have difficulty in making himself understood in another." Emerson, *ibid.*, p. 99. なお Skeat は方言の種類について，Scotland, 9; Ireland, 3; そして England and Wales, 30; の39に分類している．E. Partridge & J.W. Clark, ***British and American English Since 1900*** (Greenwood Press, 1968) p. 103.

(28) ここでは取上げないが Scotland 方言や Ireland 方言等についても附言しておく必要がある．中期英語の北部方言は次第に Scotland 低地にもひろまり，17世紀にイギリスに合併されてからは，Scotland 語も一つの方言とみなされるに至った．しかし，元来独立国であった Scotland の国民文学復興を意識して Scotland 方言による詩などを世に出したものも少くない．Robert Burns や Sir Walter Scott などが方言使用の例では有名である．一方 Ireland の場合，本来の言葉は Celt 系の Gaelic であったが，17世紀における英語方言の流入，19世紀以後の教育の普及などで次第に英語標準語が入ってくるようになってきてやがて Irish (Ireland 英語) の誕生となった．Ireland は1921年に自由国として独立しているので，Irish は植民地英語ということになるが，英語との深い関連性から考えて，一応方言の一種と考えることが出来る．このほか，Wales では Celt 系の Cymric が話されるが，England の方言の影響を受け，北部 (Flint, Denbigh) は Midland に属し，中部 England 側 (Radnor, Brecknock 東部) は Western に属し，南部 (Pembroke と Glamorgan の諸地域) は Southern に属する．Cornwall は18世紀末に Celt 系の Cornish が絶え，今では Southern が話されている．

(29) 市河三喜編，*ibid.*，による．

(30) この区画はさらに次の三つの方言地域に分けることが出来る．
(1) n. Northern including Nhb. except the northern slopes of the Cheviot Hills, a small portion of n. Cun., n. Dur.
(2) w. Northern including s. Dur. w. & m. Cum. Wm. and the hilly parts of the w. Riding of Yks., n. Lan.
(3) e. Northern including the n. and e. Ridings and a small portion of the w. Riding of Yks.
Joseph Wright, *The English Dialect Grammar* (*E.D.D.* VI.) による．以下，同じ．

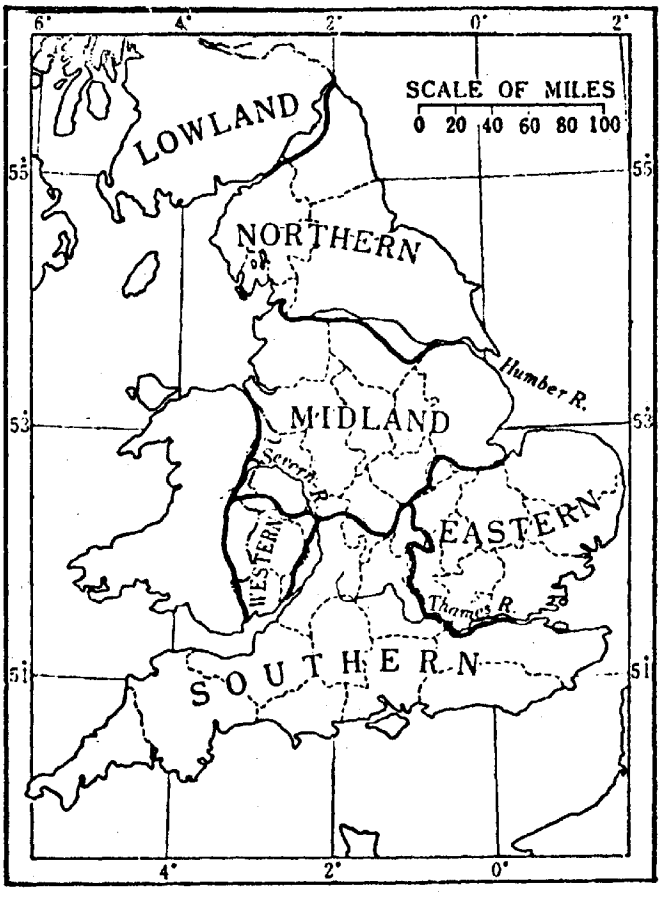

図-4

(Midland) Lincolnshire, South-East Lancashire, North-East Cheshire, North-West Derby, South-West Lancashire, The Ribble の南部, Mid Lancashire, Isle of Man, South Yorkshire, The Wharfe の西南方, Cheshire の大部分, North Staffordshire, Derby の大部分, Nottingham, Flint, Denbigh, East Shropshire, South Stafford, Warwickshire の大部分, South Derby, Leicestershire.[31]

(Eastern) Cambridge, Rutland, North-East Northampton, Essex と

(31) この区画はさらに次の十の方言地域に分けられる.
(1) Border Midland including Lin.
(2) sn. Midl. including se. Lan. ne. Chs. and nw. Der.
(3) wn. Midl. including s. Lan. south of the Ribble.
(4) nn. Midl. including m. Lan. l. Ma.
(5) en. Midl. including s. Yks. (comprising the great industrial centres of Huddersfield, Halifax, Keighley, Bradford, Leeds, Dewsbury, Barnsley, Sheffield and Rotherham on the west and south, with the connty towns of Wakefield, Pontefract and Doncaster on the east).
(6) wm. Midl. including nearly the whole of Chs., a small portion of nw. Der., nearly all Stf. lying north of a line drawn nearly east and west through Stone.
(7) em. Midl. including Der. south of the line which divides the North from the South Peak, with the exception of the peninsula between Stf. and Lei.
(8) e. Midl. including Not.
(9) ws. Midl. including Flt. Dnd. and a small portion of n. Shr. and of w. Chs.
(10) es. Midl. including Shr. east of Wem and the Severn, Stf. south of Stone, a slip of n. Wor., the greater part of War., the south portion of Der., Lei.

Hertford の大部分, Huntingdon, Bedford, Mid Northampton, Norfolk and Suffolk, Buckingham の大部分, Middlesex, South-East Buckingham, South Hertford, South-West Essex.[32]

(Western) West and South Shropshire, Hereford (東部を除く), Radnor, East Brecknock.[33]

(Southern) Pembroke 及び Glamorgan の諸部分, Wiltshire, Dorset, North and East Somerset, Gloucester の大部分, South-West Devon, Hampshire の大部分, Isle of Wight, Berkshise の大部分, South Surrey, West Sussex, North Gloucester, East Hereford, Worcester, South Warwick, North Oxford, South-West Northampton, Oxford の大部分, North Surrey, North West Kent, Kent の大部分, East Sussex, West Somerset, North-East Devon, Devon の大部分, East Cornwall, West Cornwall.[34]

---

(32) この区画はさらに次の五つの方言地域に分けられる.
(1) n. Eastern including Cmb. Rut. ne. Nhp.
(2) m. Eastern including most of Ess. and Hrt., Hnt. Bdf. m. Nhp.
(3) e. Eastern including Nrf. and Suf.
(4) w. Eastern including most of Bck. and a small portion of Hrt.
(5) s. Eastern including Mid. se. Bck. s. Hrt. and sw. Ess.

(33) この区画はさらに次の二つの方言地域に分けられる.
(1) n. Western including the greater part of Shr., and a small portion of Mtg.
(2) s. Western including e. Mon., nearly all Hrf., the greater portion of Rdn., e. Brk., and a narrow slip of s. Shr.

(34) この区画はさらに次の十の方言地域に分けられる.
(1) s. & sw. Pem. and parts of Gmg.
(2) wm. Southern including Wil. Dor. n. & e. Som., most of Glo., sw. Dev., and small portions of w. Brks. and w. Hmp.
(3) em. Southern including most of Hmp., I. W., a large portion of Brks., s. Sur. w. Sus. and a small portion of w. Oxf.
(4) n. border Southern including n. Glo., most of Wor., s. War. n. Oxf. sw. Nhp.
(5) m. border Southern including most of Oxf., and a small portion of Brks.
(6) s. border Southern including extreme se. Brks., ne. Sur. and nw. Ken.
(7) e. Southern including nearly all Ken., and e. Sus.
(8) nw. Southern including w. Som. and a small portion of ne. Dev.
(9) sw. Southern including most of Dev., and e. Cor.
(10) ww. Southern including w. Cor.

b. 方言の特徴

発音，語い，文法等の方言の持つさまざまな特徴は，厳密に言えば，一つ一つがそれぞれに異った分布範囲を示しているので，これらをひとしく，五つの方言区画にまとめることは必らずしも妥当ではない。Mod E の方言では特にそうであって，この区分ではあらわせない方言的特徴も数多く存在する。そのような制約を承知の上で，ここでは敢えて方言区画を浮彫にするために，OE, ME の例にしたがい，分類可能な主な特徴のみを *EDD* をはじめ本稿に引用の各種の資料から拾い上げてまとめていくことにしたい。

Northern

1. 北部の発音の最も著しい特徴の一つであるが，laugh, fast, path などの発音で，標準英語が長母音［ɑ:］を用いるのに対して，短母音［æ］を用いる。

2. run と pull の母音の発音に区別がなく，一般に run は［run］のように発音される傾向がある。

3. 標準英語では，find, behind 等，-nd に先行する母音の発音に二重母音を用いるが，Northern では短母音を用いて［-ind］となる。また wh- の発音は［hw］となり sh［ʃ］は s となって shall が sal となる傾向が強い。

4. 長母音は標準英語のように容易に二重母音化することがなく，例えば go, home の母音も［o:］であって［ou］とはならない。Southern では［ou］である。

5. OE *hām* の *ā* は Mod E では［ɔ:］となって ‘home’ に変ったが，このような *ā* が［ɔ:］になることは Northern では見られず，語頭に

[j] にをつけて *yam* となるような傾向がある。例えば OE *ān* ('one') は Northern では yan である。

6. 母音又は h で始まる語で強調をあらわす場合には，しばしば h が明瞭に発音される。Northumberland では例えば，強調の it (OE *hit*) は常に hit である。

7. confuse, condemn などの語においては第一音節に第二強勢をおき，statement, industry などの語には，第二音節に第二強勢をおくことが多い。その結果，このような第二強勢のおかれた母音の発音が標準英語のように [ə] とはならず，綴字通りに発音される傾向がある。

8. OE のように人称代名詞の目的格を，Sit thee down. のように再帰的に用いる傾向がある。

9. OE の強変化動詞の過去分詞は *-en* で終っていたが，この形は現在でも，comen, cropen, sitten, shutten, gotten などの形で Northern に残されている。

10. 命令形を強調する場合は，語頭にしばしば thee 又は thoo をつけ，Thee shut up! のようにいう。

11. 名詞が他の名詞を限定する時に属格のしるしを用いず，例えば its の代りに it を用いる。

12. as, at が関係代名詞として用いられ，thae, thir が区別なく these, those の代りに用いられる。また，yon, thon が区別なく that those の代りに用いられ，I am が I is となるような傾向がある。[35]

(35) Wright, *ibid.*, p. 2.

Midland

1. throat, stone のような語の発音が一部では，[θrɔit] [stuən] のようになされる。

2. Midland 北西部の特徴として，標準英語の発音では [ŋ] となるべきところが，例えば tongue [tʌŋg] のように [ŋg] と発音される。

3. ng の前にくる ME *a* 及び *o* は，それぞれ [u] 又は [ʌ] となって一部中部方言に残された。among, mongrel, iron monger などは，この変化が標準英語に残された例である。

4. 北方地域で 'she' の OE 形 hēo が方言として *hoo* の形で残され，[u] 又は [u:] と発音されている。

5. Mid Midland の北部では Northern と同様に属格の語尾がない。前述の she が hoo となるほか，its は it である。his, hers, yours もそれぞれ hisn, hern, yourn となる傾向がある。

6. 直説法現在一人称単数の語尾はしばしば -en 又は -n で終り，have は han, am は bin, shall は shan のようになる。

7. ある地方では be が直説法現在のすべての人称に用いられ，またある地方では，動詞の複数が -en に終る。

8. Mid Midland の南部では him の代りに *en* を，she の代りに her を用いる。また一部の地域では Southern と同様に，this, that の代りに区別なく thick を用い，that の代りに thack を用いたりする。[36]

---

(36) もう少し地域的にこまかく分類すれば次の通りになる．"In north Hampshire *thick* is always used for *this*, and *thuck* for *that*; In Dorset *thick* is only used for the personal class of formed individual object; in west Somersent *thick* corresponds to the Latin iste: of a knife it would be said, *thicky is mine*, but when the noun has already been mentioned or is to be mentioned in the sentence, the pronouns *this*, *that* are used." Wright, *ibid.*, (*E.D.D.* VI) p. 76.

9. Midland 東部では idea*r* of it のように 'R'-linking が普通に行なわれており，Southern と同様直接法現在のすべてに be を用いる傾向がある。

Eastern

1. Eastern 南部で，r の前の th は three を [dri] というように，しばしば [d] と発音される。idea*r* of it の "R"-linking も Midland 東部と同じようにあらわれる。

2. 語頭及び語中にくる v は，しばしば [w] と発音され，about は [əbɛut] となる傾向が強い。

3. those (who……) の代りに they (that……) が用いられる。[37]

4. his は *hisn* となって，hisn old women のように言う。

5. as が関係代名詞として，また，be が直説法現在形すべてに用いられる傾向がある。

Western

1. Western 南部では，語頭の *f* 及び *s* はしばしば有声音化される。例えば OE *fœt* は *vat* になり，OE *fyxen* は *vixen* となったが，これらはそのまま標準英語として用いられている。

2. Western 南部では，語の中に子音 l-r, r-l, n-r が含まれる場合，この中間に d を入れて発音する傾向がある。したがって，'parlour' は parlder となり，'corner' は carnder となる。

---

(37) "*Those* is seldom or never heard in genuine dialect speech. Its place is supplied by *they* especially used as the antecedent of the relative." Wright, *ibid.*, p. 76.

3. here, there を強調する場合，方言では指示代名詞 this, that をつけて，this here, that there などというが，Western 南部では thick here, thack there のような言い方がある。また Southern と同じく，迂言形の do が用いられる。

4. about を [əbɔut] 又は [əbəut] と発音する。これは Northern では [əbu:t], Midland では [əbaut, əbait, əbɑ:t, əbɔut] である。

5. Southern 西部でもそうであるが，her を she の代用とする表現がある。また，en [ən] が him の代りに用いられる。

Southern

1. Midland 南部と同じく，語頭の *s*, *f* が [z], [v] と有声音化する。

2. 迂言形の do が用いられて，I do love (=I love) のように表現する。(38)

3. 特に Southern 西部で，Midland と同様 going を [gwa(:)in] 又は [gwe(:)in] と発音する傾向がある。

4. 'eye' は OE では ēage で，主格複数は ēagan であったが，この -an 語尾は -en となって南部方言にその名残りをとどめている。'eye' の

(38) これは ME の名残りで，現在のアメリカ英語の用法も無関係ではない．
"Another important Middle English development is the extended use of the auxiliary *do*. It was occasionally used in Old English, as now, to avoid repeating a verb ('I know that as well as you do'), and also as the periphrastic affirmative, which survives poetically ('How does the little busy bee improve each shining hour!'); but it was during the Middle English period that it began regularly to replace the simple form in negative and interrogative sentences ('Do you see?' 'No, I don't see'), and as an emphatic form ('He did make a fuss about it'). The use of this verb has been quite recently extended in American, which now says 'Do you have?' and 'I don't have', for 'Have you?' and 'I haven't'. Ernest Weekley, *The English Language* (Andre Deutsch Co., Seibido 版 1958) pp. 37–38.

複数形 *een* [i:n] はこの地方では普通である。[39] ただし，Midland にもこの傾向は見られる。

5. ME では 'I' をあらわす語として [i] のほかに強調の *ich* があったが，この *ich* は標準英語では消滅して南部方言に残されている。[40]

6. OE の対格 *hine* が南部方言に残って，him が 'im, 'en, 'un となり，人間をあらわす場合のほか，事物に対しても用いられる。

7. Midland と同様に，所有代名詞の形を hisn, hern, ourn, yourn のように，語尾に -n をつけて用いる傾向がある。

8. Northern と同じく，was not able, was he? のように主語を後から示す表現が見られる。

IV. 現代英語方言の調査

a. English Dialect Society の方言調査

ドイツの Georg Wenker が *Deutschen Sprachatlas* 作成にとりかかったのが1876年で，これが近代的な言語地図調査のはじまりであるとされている。このあとでフランスも，1902年から1910年にかけて Jules Gilliéron が中心となり，*Atlas linguistique de la France* を作成した。[41] このような言語地図先進国に比べると，イギリスは明らかにこの分野では後れをとっていた。Orton と Dieth がはじめての試みとして，イギリス全土にわたって調査した成果である *Survey of English Dialects* の資料が一部公刊されはじめ

---

(39) 標準英語の children はこの影響を受けた一例である.

(40) ただし，すたれつつある. [i] は強調されると [i:] になり，これが現在の 'I' [ai] に発達した.

(41) 武本昌三「アメリカ英語における方言の研究」『室蘭工業大学研究報告』第5巻第2号参照.

たのは1962年から63年にかけてであって，わずか十数年前のことであるに過ぎない。[42]

しかし，イギリスの研究者達が特に方言に関心が薄かったわけではなかった。ヨーロッパ諸国では，自国の方言の諸相を早くから地理的分布の上で把握していこうとする試みがあったのに対し，イギリスでは，地方毎に方言としての語いそのものに重点をおいた調査研究にとどまるような傾向があった。しかもそれらは，方言研究機関がなかったためもあって，おおむね個人研究のレベルを越えることがなく，海外で評価を受けるということも少なかったのである。このような情況の下に，Aldis Wright は，先づ方言調査機関を設置して資料の収集をはかることが緊急必要事であるとして，次のように訴えた。[43]

> "In a few years it will be too late. Railroads and certificated teachers are doing their work. Let each provincial word, and usage of a word, be recorded, with an example of its application if necessary, and a note of the place where it is so used; but of etymologies let collectors beware."[44]

当時 A. J. Ellis は大著 *Early English pronunciation* の著作中であったが，彼はこの Wright の呼びかけに応じて，1871年刊行の同著書の introduction で同様の提案を行ない，彼自身は，1889年刊行の *Early English pronunciation* 第5巻を，英語方言の音韻論的研究に捧げている。これは，イギリス方言研究の上では，最初の最も重要な文献となった。イギリスで最初の *English Dialect Society* が W. W. Skeat を secretary にして設立さ

---

(42) 方言調査の資料は揃ったが，これらの厖大な資料の出版にはさらに数年を要した．当時の彼等の計画のうち，Atlas そのものはまだ出版されていない．Allen & Underwood ed., *ibid.*, pp. 238–239 参照．

(43) Brook, *ibid.*, p. 155.

(44) この語源についての Wright の警告は，その後発足した Dialect Society から出された *Rules and Directions for Word-Collectors* の中でもくり返されている．語源探索は，先づ方言資料が十分に収集出来てから後に考えるべき問題であり，方言調査の段階で語源を考えることは，方言の正しい意味をゆがめてしまう危険がある，という根拠からであった．Brook, *ibid.*, pp. 155–156.

れたのは，このような刺激が背景になっていた。それは1873年のことである。イギリスにおける組織的な方言研究の機運はこれで一層盛上り，このDialect Societyの地方版も，その後イギリス各地で作られるようになった。

新設のEnglish Dialect Societyは早速意欲的に方言研究の成果を出版しはじめた。その中には，最も初期の，方言調査のためのテキストや研究報告も含まれていて，今日でもなお，貴重な参考資料として用いられている。ただ一つの欠点と考えられることは，これらの出版物の多くが方言をcounty別に分類していることである。実際には，発音，語い，文法等のどれを取上げてみても，それらの等語線は，countyの境界線と一致することは殆んどない筈であるから，county別の分類では方言の現実の分布状況は摑みにくい。1898年から1905年にかけて出版されたJoseph Wrightの*English Dialect Dictionary*は，イギリス方言研究史上のlandmarkともいえる劃画的な労作であるが，しかし，その多くの資料をほかならぬこのDialect Societyの出版物に仰いだという制約があった。彼のcounty毎の方言分布の要約も，当然のことながらあいまいさをまぬがれぬことになり，このようなことが一部で，同書の評価を低くしている一つの原因になっている。(45)

English Dialect Societyは創設後3年で本部をManchesterへ移した。1893年にさらにOxfordへ移転するまで，ManchesterはEnglish Dialect Societyの最も長い活動の本拠であったが，その名残りは今日，Manchester Central Libraryに800冊以上の文献資料となって残され，今なお，イギリス方言研究のMeccaとなっている。しかしEnglish Dialect Societyの方は，Oxfordへ移転して間もなく解散してしまった。そのために生じた方言

(45) 同書の評価についてはBrookも次のように述べている．"Wright realized the necessity of limiting the scope of his dictionary and he aimed at including only words which had been known to be in use since 1650. A further restriction, which was harder to justify, was that words would be included only if written authority could be given for them. The rule was not a complete protection against the inclusion of bogus words and it may well have excluded valuable material now irrevocably lost. The value of Wright's was not fully appreciated by all his contemporaries, and one good-humoured gibe was that *OED* was Don Quixote while *EDD* was Sancho Panza." Brook, *ibid.*, p. 154.

研究上の空白は一部，各地の county dialect society によって埋められていくことになる。中でも，方言研究に熱心な北部のいくつかの county society の活動が目立ち，Yorkshire Dialect Society はその代表格として，1897 年創設以来今日に至るまで，方言研究の多くの実績を上げてきた。[46] この他にも，1939 年創設の Lakeland Dialect Society や 1951 年創設の Lancashire Dialect Society が毎年，方言研究に関する研究報告書を刊行してきている。[47] このような county society は，独自に組織的な方言調査なども行っているが，それらは殆んど郵便を利用したアンケート方式によるものであった。それらの結果は，Harold Orton の 'Yorkshire Terms for Earwig and for the Mid-Morning Meal' (TYDS, 1958) や A.W. Boyd の 'Farming Terms' (JLDS, 1959) などに残されている。しかし field worker を使ってのイギリス全土にわたる本格的な方言調査は，冒頭にも述べたように，Harold Orton と Eugene Dieth によるものが最初である。これはイギリス方言研究史上文字通り画期的な一大事業であった。

b. Orton と Dieth の言語地図作成

Harold Orton が旧知の間柄である Zurich 大学の Eugene Dieth と，この大規模な言語地図作成のための調査を計画しはじめたのは，第二次大戦終了後間もない 1946 年にさかのぼる。この全土的な方言調査を前にして，彼等がたてた見通しは次のようなものであった。

---

(46) この Society は，もともと EDD のための資料収集を目的にして Joseph Wright の助言の下に 1894 年に設立された the Yorkshire Committee of Workers が発展して作り上げられたものである．

(47) それらの業績の若干の例をあげれば次の通りである．(*The Transactions of the Yorkshire Dialect Society*) William Barnes: the Dorset poet, 1917; Essex dialect, 1918; the dialects of Northumberland, 1930; slang, ant and jargon, 1935; Shakespeare's use of dialect, 1950. (*The Journal of the Lakeland Dialect Society*) Lakeland Dialect Study, 1953; The Linguistic Survey of Scotland and its Activities in Cumberland, 1955. (The Journal of the Lancashire Dialect Society) the Leeds survey of dialectal English, 1952; the study of dialect in Germany, 1954; the study of German dialect in Switzerland, 1955; linguistic geography, 1956; Cheshire place-names, 1956; the study of American dialects, 1959, 1960.

Our task, as it presented itself to us in 1946, fell into several stages. First, there was the production of a comprehensive questionnaire, to reveal the distinctive lexical, phonological, morphological and syntactical features of all the main English dialects; second, the selection of an adequate network of rural localities with enough dialect-speaking informants of the right kind; third, the selection and training of competent fieldworkers to use the Questionnaire for securing the responses wanted from informants; fourth, the editing of all this material preparatory to publication; fifth, the publication of the results of the Survey in a suitable form, whether maps, or lists, or both; sixth, the provision of the necessary accommodation from which to carry on the Survey; lastly, the requisite money to finance the project had to be assured.(48)

彼等はまず，1947年の夏に10週間をかけて最初の質問事項表を作り上げた。これを数年にわたって，実際にイギリス各地で試用してみた上で若干の修正を施し，印刷に附されたのが1952年の *A Questionnaire for a Linguistic Atlas of England* である。質問事項はおよそ1,200あり，その内容は，発音に関するもの365，語の形態に関するもの62，文法に関するもの41，語いに関するもの730というように分けられていた。(49)

調査対象にされた地区は全土から311箇所えらばれたが，それらは主として人口400人から500人くらいの地方の村落で，村落相互の距離は通常15

(48) Harold Orton "An English Dialect Survey: Linguistic Atlas of England," *Orbis*, IX (1960), p. 333. 全文は Harold B. Allen & Gary N. Underwood 編; *Readings in American Dialectology* (Appleton-Century Crofts, 1971) pp. 230–244 に再録.

(49) これらは全体として九つの分野に分けられていた. "They are arranged in nine numbered Books, or sections, entitled respectively The Farmstead; Cultivation; Animals; Nature; The House and Housekeeping; The Human Body; Numbers, Time and Weather; Social Activities; and the ninth and last, States, Actions and Relations. In short, it concerns the farmer and his domestic and social life. Why the farmer? Because he and his family and the farming community in general, best preserve regional dialect in England today." Allen & Underwood ed. *ibid*,, p. 233.

マイルを越えることのないように配慮されている。一方，調査地区の informant の条件は，"traditional vernacular, genuine and old" を話している66才以上の農業専従者とされた。これは，ともすると地域的にかたより過ぎるきらいのある鉱業や商業，漁業，織物業などの業種の従事者に比べて，全国的に分布していて，しかも informant としての資質の点で最適と判断されたからである。調査そのものは，1961年に完成した。Harold Orton は，この調査で得られた資料を基に作成した言語地図の次のような下図（図-5～図-8）を，*funnel*, *newt*, *scraps*（豚の腎臓からとった脂肪かす），*snack* の四語について彼の論文に紹介している。(50)

む　す　び

現在，*Linguistic Atlas of England* そのものの出版は未だ行なわれていないが，Orton と Dieth によってはじめられた方言調査資料の集大成である *Survey of English Dialects* は，Orton と Halliday 及びその他の共同研究者の編集の下に，全巻その出版を完了している。(51) このほか，本文には言及する余裕がなかったが三十数年前にアメリカの Guy Lowman によってなされた，イギリス方言の実地調査の結果も(52)今では参考にすることが可能である。

---

(50) Harold Orton, *ibid.*, *Readings in American Dialectology*, pp. 239–242 より転載.

(51) 次のような順序で印刷刊行された. *Survey of English Dialects* (A): *Introduction* (Leeds, 1962); Harold Orton and Wilfrid J. Halliday (eds.), *Survey of English Dialects* (B): *Basic Material*. Vol. I: *The Six Northern Counties and the Isle of Man*. Part I (Leeds, 1962), Parts II and III (Leeds, 1963); Harold Orton and Philip M. Tilling (eds.), Vol. II; *The East Midland Counties and East Anglia*. Part I (Leeds, 1969), Parts II and III (Leeds, 1970); Harold Orton and Michael V. Barry (eds.), Vol. III: *The West Midland Counties*. Part I (Leeds, 1968), Parts II and III (Leeds, 1970); Harold Orton and Martyn F. Wakelin (eds.), Vol. IV: *The Southern Counties*. Parts I and II (Leeds, 1967), Part III (Leeds, 1968). Lawrence M. Davis ed., *Studies in Linguistics* (Univ. of Alabama Press, 1972) p. 203.

(52) Lowman は主としてイギリス南部の方言調査を行ない，その記録を Hans Kurath と共同で，*Worksheets for Southern England* (1937) に残している．アメリカ方言との関連性からこの資料を用いて論じたものに Wolfgang Viereck, "Regional Verb Forms in Southern England" Studies in Linguistics (Univ. of Alabama Press, 1972). がある.

したがって現在では，イギリス英語の方言分布の実態に関する知識もかなり増えてきたといえるであろう。

しかし，それにもかかわらず，かつて Atwood も訴えていたような，方言分布状況の変遷や，言語史的な研究については，アメリカと同様，イギリスでも，まだ決して充分ではない。それに，アメリカ英語の言語地図との関連においてイギリス英語の言語地図調査資料を見ていく場合，注意しなければならないことは，この両者の調査方法は決して同じではなかったということである。すなわち，イギリスの場合，対象となった informant は，田舎に住む，無教育の60才以上の老人達であって，これはアメリカの調査における Type I の informant に相当する。informant に対する質問の仕方にも微妙な相違があった。[53] このままでは当然，中年以下の年令層や，学校教育を受けたいわゆる Type II, Type III についての方言比較は可能ではない。このように見てくると，これまで述べてきたようなイギリス方言の調査研究の結果をふまえた上でも，なお，アメリカ英語方言との関連性追及には，種々の困難がつきまとうのである。

本稿はもとより，そのような比較研究を目的とするものではなかった。ここで取上げたのは限られた紙数の中での，イギリス方言の一つの俯瞰図であるに過ぎず，視野も限定されている。いま，アメリカ英語とイギリス英語の方言研究の，厳しく困難な将来の展望を前にして，このささやかな足跡をふりかえってみると，忸怩たる思いがないわけではない。

---

(53) "the American interviewer uses simply a minimal lexical clue in improvising his question to suit the informant and the situation. The American records are thus more likely to include relevant but unanticipated information, while the English records are more likely to exclude ambiguous responses. What one gains in precision it sometimes loses in freedom; what the other gains in freedom it may lose in precision." Allen & Underwood ed., *ibid.*, p. 228.

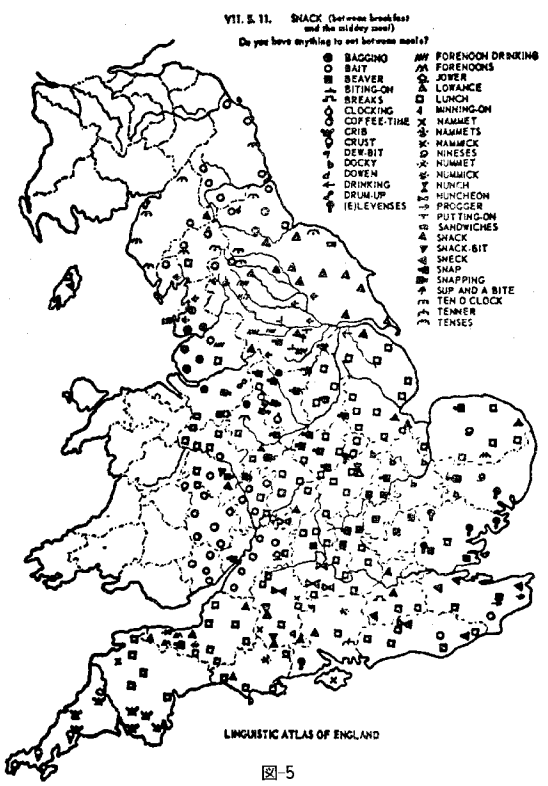
VII. 5. 11. SNACK (between breakfast and the midday meal)
Do you have anything to eat between meals?
BAGGING
BAIT
BEAVER
BITING-ON
BREAKS
CLOCKING
COFFEE-TIME
CRIB
CRUST
DEW-BIT
DOCKY
DOWEN
DRINKING
DRUM-UP
(E)LEVENSES
FORENOON DRINKING
FORENOONS
JOWER
LOWANCE
LUNCH
MINNING-ON
NAMMET
NAMMETS
NAMMICK
NINESES
NUMMET
NUMMICK
NUNCH
NUNCHEON
PROGGER
PUTTING-ON
SANDWICHES
SNACK
SNACK-BIT
SNECK
SNAP
SNAPPING
SUP AND A BITE
TEN O CLOCK
TENNER
TENSES
LINGUISTIC ATLAS OF ENGLAND

図-5

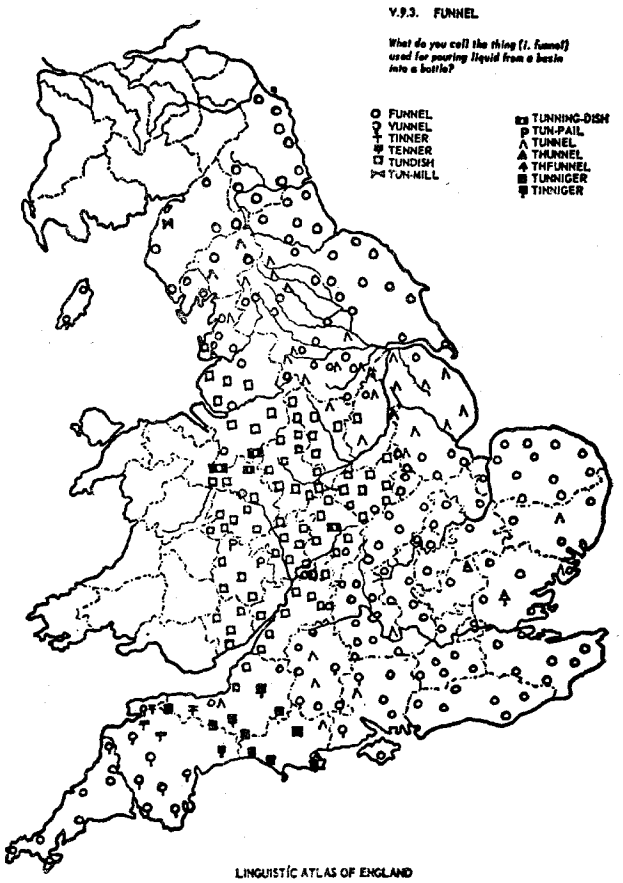
V.9.3. FUNNEL
What do you call the thing (i. funnel) used for pouring liquid from a basin into a bottle?
FUNNEL
YUNNEL
TINNER
TENNER
TUNDISH
TUN-NILL
TUNNING-DISH
TUN-PAIL
TUNNEL
THUNNEL
THFUNNEL
TUNNIGER
TINNIGER
LINGUISTIC ATLAS OF ENGLAND

図-6

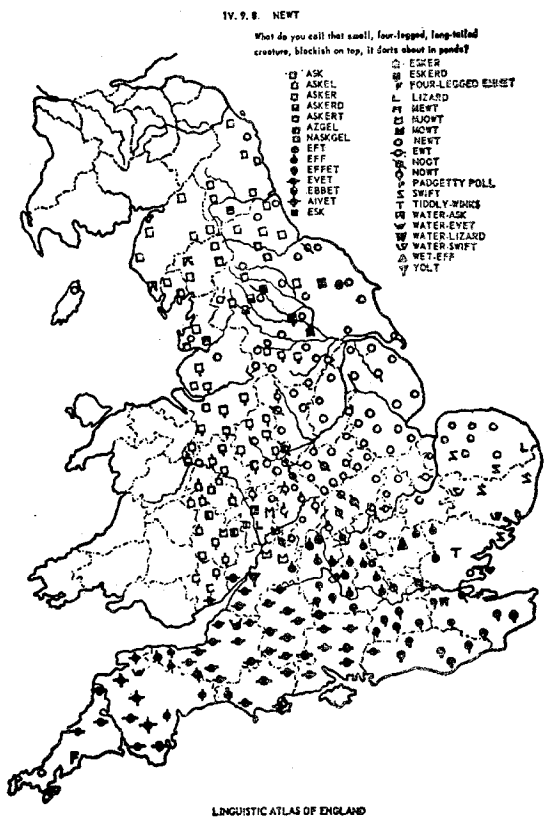
IV. 9. 8. NEWT
What do you call that small, four-legged, long-tailed creature, blackish on top, it darts about in ponds?
ASK
ASKEL
ASKER
ASKERD
ASKERT
AZGEL
NASKGEL
EFT
EFF
EFFET
EVET
EBBET
AIVET
ESK
ESKER
ESKERD
FOUR-LEGGED ESKET
LIZARD
NEWT
NUOWT
NOWT
NEWT
EWT
NOOT
NOWT
PADGETTY POLL
SWIFT
TIDDLY-WINKS
WATER-ASK
WATER-EVET
WATER-LIZARD
WATER-SWIFT
WET-EFF
YOLT
LINGUISTIC ATLAS OF ENGLAND

図-7

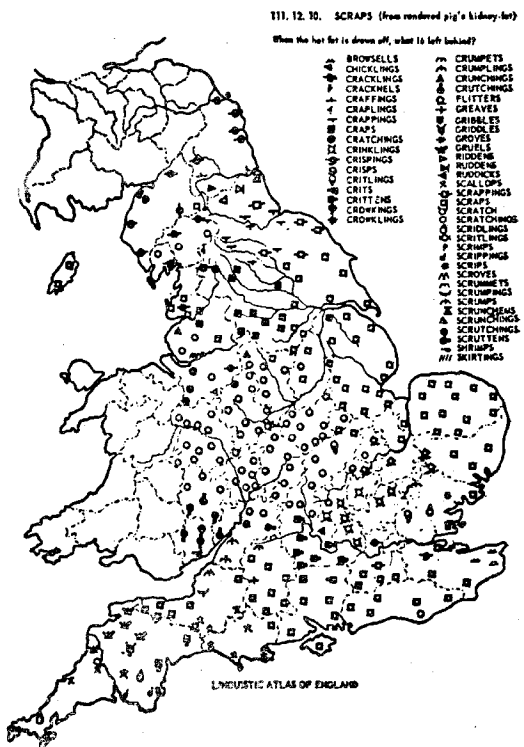
VII. 12. 10. SCRAPS (from rendered pig's kidney-fat)
When the fat fit is drawn off, what is left behind?
BROWSELLS
CHICKLINGS
CRACKLINGS
CRACKNELS
CRAFFINGS
CRAPLINGS
CRAPPINGS
CRAPS
CRATCHINGS
CRINKLINGS
CRISPINGS
CRISPS
CRITLINGS
CRITS
CRITTENS
CROWKINGS
CROWKLINGS
CRUMPETS
CRUMPLINGS
CRUNCHINGS
CRUTCHINGS
FLITTERS
GREAVES
GRIBBLES
GRIDDLES
GROVES
GRUELS
RIDDENS
RUDDENS
RUDDOCKS
SCALLOPS
SCRAPPINGS
SCRAPS
SCRATCH
SCRATCHINGS
SCRIDLINGS
SCRITLINGS
SCRIMPS
SCRIPPINGS
SCRIPS
SCROVES
SCRUMMETS
SCRUMPINGS
SCRUMPS
SCRUNCHENS
SCRUNCHINGS
SCRUTCHINGS
SCRUTTENS
SHRIMPS
SKIRTINGS
LINGUISTIC ATLAS OF ENGLAND

図-8